

第3回「きょうから音読名人！」

代表者 和田 美沙子 (教育学部 学校教育教員養成課程 3年)

1. 目的と概要

音読は、脳が活性化するとともに、全ての教科の基本となる国語力を身につけるために有効である。そのため、現在香川県下の小学校において、校内音読発表会の実施など、音読が盛んに行われている。より多くの子どもたちに音読発表の場を設けることで、音読の楽しさを子どもと保護者等に体験してもらおうとともに、子どもと保護者等とのコミュニケーションの機会となることを目的として企画した。

本イベントでは、県内の幼小中学生による音読発表会、群読を取り上げての参加型音読教室の2部構成で行った。

2. 実施期間(実施日)

平成21年7月1日から平成21年12月31日まで

プチ音読発表会(プレイベント) 平成21年10月31日

第3回「きょうから音読名人！」 平成21年11月29日

3. 成果の内容及びその分析・評価

●イベント開催に向けての準備

〈広報活動〉

音読発表会への広報活動として、美術専攻のスタッフがチラシとポスターを作成し、県下に配布を行った(チラシ1万枚、ポスター100枚)。配布依頼先は、県市町教育委員会(21ヶ所)、小学校(188校)、スタッフの学生ボランティア先等の小学校(27校)、公立図書館(30ヶ所)、大学近隣やスタッフの自宅近くの店舗等(29ヶ所)である。学生ボランティア先等の小学校に関しては、全校児童へ配布依頼を行い、多くの家庭にチラシが渡るよう工夫した。

また、ポスター・チラシ以外にも、工学部の学生がホームページを作成し、インターネットを通しての広報も行った。



[美術専攻のスタッフ作成のチラシ]

〈出演者の決定〉

音読発表会への応募者が多数の場合は、事前に抽選を行い、イベント当日の発表者を決定することを通知していた。音読発表会への応募は42組58名であり、抽選の開催の有無についてスタッフ会で検討した結果、「より多くの子どもたちに音読発表の場を設ける」という目的で企画していることを考慮し、応募者全員の出演を決定した。

学校でチラシを見た子どもや、英会話教室等の団体から応募があり、たくさんの子どもたちが音読に関心があること、そして、子どもたちのみならず保護者も音読発表の場を求めているということを実感した。



〔スタッフ会での話し合いの様子〕

〈プチ音読教室〉

抽選会を予定していた大学祭1日目に「プチ音読教室」を開催し、48名（子ども22名 大人26名）の参加があった。

前半のなりきり音読では、大学生が物語の模範音読を示した後、それぞれの子どもたちが自分の担当する登場人物を決め、グループごとに音読を行った。

後半の音読発表では、出演予定の子どもたちが練習する作品を持ち寄り、本番に向けての練習を行った。

大学祭中に開催したことにより、一般の人たちへの広報にもつながった。



〔役になりきって音読する子どもたち〕

〈その他〉

本イベントを開催するに当たって、後援申請等の文書作成も学生がすべて行った。外部への依頼文書の作成は今まで経験のないことであり、難しさを実感した。また、スタッフとのデータのやり取りや共有、取り寄せの日数を逆算しての物品購入、リハーサルの日程調節など、イベント全体の流れを見通して計画的に準備を進めることの重要性を学んだ。

●イベント当日

〈子どもリハーサル〉

イベント当日の午前中に、音読発表会に参加する子どもたちのリハーサルを行った。リハーサルでは、簡単なゲームで緊張を解したあと、集合と入場の仕方、舞台上からの発表・退場までの流れをスタッフが実際に手本を見せながら確認した。事前の一連の動きを体験することで、子どもたちは音読発表のイメージをつかみ、不安を取り除くことに繋がったと考えられる。



〔動きの説明の様子〕

〈音読発表会〉

音読発表会は、4部に分けて行った。当日はインフルエンザなどの影響もあり29組41名の参加となった。前回（H21.1.25開催）の反省を生かし、発表の順番を幼児や低学年がいるグループを各部の前半に置き、待ち時間に集中力を欠くことのないように配慮した。また、音読発表の間は学生スタッフがステージ裏に待機し、子どもたちの緊張感をほぐし、リラックスできるような対応を心がけ、待機している間も静かに待てるよう考慮した。そのため、発表者も落ち着いて十分に力を発揮できたように思う。



〔音読発表の様子〕

〈参加型音読教室〉

参加型音読教室では、国語専攻のスタッフの指導のもと、会場全体で群読に取り組んだ。群読とは、一人で読んだり大勢で読んだりと読み方を工夫して、迫力を出し、立体的な表現にする音読活動である。

大学生による群読発表では、ステージへの入り方を工夫し、来場者の群読への興味・関心を高められるようにした。その後、スタッフが観客席に移動して指導を行い、会場の一体感を感じられる音読教室となった。



〔来場者とスタッフの群読の様子〕

●アンケート及び来場者の反響

本イベントの来場者に対してアンケートを実施した。来場者（出演者を含む）119名のうち、回答者は68名であった。

表1 来場者のアンケート結果

	音読発表会	音読教室	スタッフの対応	総合
非常に良い	27	27	41	27
良い	30	14	17	25
普通	2	3	2	4
悪い	0	0	0	0
非常に悪い	0	1	0	0

（回答者 小学生以下42名、学生3名、保護者・家族9名、教育関係者2名、一般12名）

〈広報活動〉

イベント当日は 11 月には珍しく大変寒い天候であったにもかかわらず、香川県内だけでなく県外からも参加があった。アンケートの中には「県外にも案内をしてほしい」との意見があったので、次回はメディアへの働きかけに関してもさらに工夫をしていきたい。

子どもたちが音読発表に取り組む姿を見た来場者からは「みんなの音読が聞けてよかった」「子どもがよかった」という意見があった。子どもたちが音読発表に取り組めただけでなく、その発表を聞いた保護者や一般の来場者も楽しめる機会であったと考えられる。

〈音読発表会〉

音読発表会に出演した子どもたちからは、「発表ができてうれしかった」「楽しかった」「緊張した」「とても満足」などの感想があった。本イベントは音読発表の機会を設け、その楽しさを体験してもらうことを目的としていたが、音読発表会では発表の楽しさを感じ、自分自身の発表にも満足して帰ってもらうことができたと思われる。

〈参加型音読教室〉

参加型音読教室では来場者全員に台本を配布し、会場全体で群読に取り組めるようにした。スタッフの発表のみで終わるのではなく、来場者に実際に群読に取り組んでもらうという、体験を重視した。アンケートからも「群読がよかった」「群読をボランティアに取り入れたい」という意見があり、スタッフのみでなく、来場者も楽しめる音読教室であったと言える。

〈スタッフの対応〉

今回は、参加型音読教室でグループ分けが必要であったため、来場者に 4 色のリボンを配布することでグループ分けを行った。グループごとに座席を指定し、リボンの色と同じ色の画用紙を持ったスタッフがステージ前で来場者を案内して、スムーズに席に座れるようにした。開演までの時間にはスタッフが選んだお薦めの本を紹介し、来場者が時間を持て余すことのないように配慮した。

また、イベント開催時期にインフルエンザが流行していたため、安心してイベントへ参加できるよう入口に消毒液とマスクを準備し、来場者が必要に応じて利用できるようにした。寒さ対策として、受付ではカイロを準備し、会場内のスタッフもカイロを携帯して来場者に配布した。来場者の方の感想に「カイロ・マスクの配慮がいい」との意見があり、好評であった。



【会場案内のスタッフ】



【受付でマスクやカイロを利用する来場者】

〈その他の意見〉

イベント全体に関して、来場者から「評価がないのがよかった」「私語がなくてよかった」「これからも継続してほしい」という意見があった。特に、私語に関しては前回の反省を生かし、スタッフの配置や会話についての注意を十分に意識できていたためだと思う。

一方で、「半日でできるようにしてほしい」「発表時間を守れるような工夫が必要」「前半の人が帰ってしまうのが残念」といった意見、また、遠方からの来場者からは「家が遠いので前半に読みたかった」「駐車場配慮してほしい」という意見があり、今後よりよいイベントとするための反省点も残った。「今後も継続してほしい」という意見もあり、継続していく上で、多くの方が参加したいと思える魅力あるイベントとするために、今回の反省点を生かせるように取り組んでいきたい。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

子どもたちは、日頃から学校や家庭において音読の練習に励んでいる。しかし、香川県内では、その練習の成果を発表する場が十分にあるとは言えない。出演児童・保護者へのアンケートにおいても、出演動機として「練習の成果をみんなに見てほしかったから」「ずっと発表の場がほしかったから」といった声があった。そんな中、子どもたちが自由に参加することができる本イベントの開催は、普段の音読練習の成果を発表するための場を設けることができたと考える。音読発表当日を目標にして練習し、音読の力をさらに高め、そして人前で練習の成果を発揮することで自信をつけてもらうための良い機会であったと思われる。また、こうしたイベントを継続することによって、香川県下における音読活動がさらに盛んに行われるきっかけになると考える。

さらに、香川大学講堂での開催ということで、地域の方々にとって本学が身近に感じられるようになったのではないだろうか。イベントの前後にも、本学の広い敷地内を嬉しそうに駆け回る子どもたちの姿を見ることができた。そして、スタッフにとっても、外部からの多くの方々の訪問により、香川大学生としての自覚を持ち、自分たちの一つ一つの行動にも責任を持ってイベントに取り組むことができた。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

スタッフ（47名）にもイベント後にアンケートを実施した。「イベントに参加してどうでしたか。」という問いに対して、「大変よかった」46%、「よかった」54%と、非常に高い満足度を得ることができた（図1）。また、「イベントでの経験は、今後の生活を送る上で生かされると思いますか。」という問いに対しては、「大変役に立つ」33%、「役に立つ」64%であった（図2）。本イベントの企画・運営を通して多くの事を学び、成長することができたと言える。学部や研究室をこえて多くの学生と接し、相手のことを思って行動することで、コミュニケーション能力やチームワークの大切さを改めて学んだ。また、学生によるイベントの企画・運営は、普段の学生生活では経験することのできないものであり、準備を進めていくにつれ、自分たちの可能性の広がりを実感するきっかけとなった（表2）。

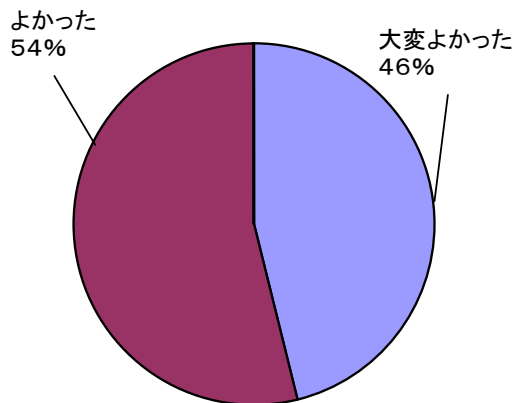


図1 イベントに参加してどう思ったか

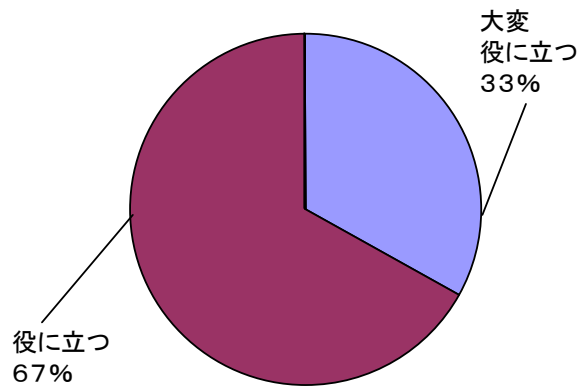


図2 イベントでの経験が生かされると思うか

表2 学生スタッフのアンケート結果

問 イベントでの経験で、どのようなことがよかったですか

- ・ 学年や研究室を越えて、協力できたこと
- ・ 想定外のことが起こるかもしれないという意識を持つことで、対応力が身に付いたこと
- ・ 出演者や来場者の目線に立って、話し合いや当日の行動ができたこと
- ・ イベントを企画・運営する大変さとともに、やり遂げる達成感を感じることができたこと
- ・ 他人への配慮を学ぶことができたこと
- ・ 子どもたちの今まで見たことのない姿を見ることができたこと
- ・ ひとつのイベントを成功させるためには、事前の準備を念入りに行わなければならないことがわかったこと

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

〈反省点〉

イベント終了後、スタッフで反省会を行い、担当ごとに良かった点、改善すべき点について話し合った。

前回のイベントでの「寒かった」という反省点を生かし 11 月の開催としたが、当日は冷え込み、やはり寒いという声が聞かれた。開催時期について、参加者の立場になり、もう少し考えた上でイベントを開催する必要があった。また、午前中に子どもリハーサル、午後に本番を行い、時間的ゆとりができたことは評価できる半面、参加者の拘束時間が長い点と子どもたち



【係ごとの反省の様子】

を長時間緊張状態にしてしまう点においては今後検討が必要である。

そして、応募者多数の場合は、事前に応募者自身に抽選をしてもらい、イベント当日の発表者を決定することを通知していた。しかし、応募者からは「出演はしたいが、抽選の日には学校行事があり参加できない」というような問い合わせを多く受けた。そこで、より多くの子どもたちに発表の場を設けるために、兄弟姉妹で各自1人読みでの応募者に対して、2人読みへの変更を依頼し、グループ数を調整することで応募者全員が本番のステージに立つことができた。今後さらにイベントの認知度が高まり応募者が増えた場合に、どのような方法で当日の出演者を決定するのかを、イベント趣旨や参加者の要望を参考に検討していきたい。

この他にも、各係で改善すべき点があり、具体的には「考えが至っていなかった部分があった」や、「予想外のことに対応ができなかった」などの意見が挙がった。準備の段階から、イベント参加者の視点に立ち、どのような問題が起こるかを事前に予測し、対応を考えておく必要があったと考える。

そして、本イベントを盛り上げるためには、さらに観客を増やす工夫が必要だと言える。広い会場を観客でいっぱいにし、参加者が気持ちよく発表できるよう、メディアへの取材依頼やスタッフ自らイベントの宣伝活動を行うなど、イベントについて地域の方々へさらにアピールする方策を考えていきたい。

〈今後の抱負〉

出演者・来場者の方からのアンケートから、「来年も出演したい」「継続してほしい」という意見を多く聞くことができたので、その声に応えていきたいと思う。今回のイベントでは、前回のイベントからの反省点を踏まえ改善していくことができた。次回も今回のイベントでの反省点をもとに、参加者がさらに満足できるものにしていきたい。また、学生スタッフからも「もっとたくさん子どもたちに発表の機会を作りたい」「他の音読活動にも挑戦したい」「スタッフをもっと増やして、盛り上げたい」という声もあったので、今後もこのイベントを継続し、香川大学を代表するイベントの一つにしたい。

7. 実施メンバー

代表者	和田 美沙子 (教育学部3年)		
構成員	高峰 京子 (教育学部4年)	引地 香織 (教育学部3年)	
	富田 唯 (教育学部4年)	牛島 浩晶 (工学部3年)	
	三谷 亜也佳 (教育学部4年)	秋山 弘次 (教育学部2年)	
	高橋 範久 (教育学部4年)	板倉 由衣 (教育学部2年)	
	下村 綾佳 (教育学部4年)	植松 恵 (教育学部2年)	
	松川 知佳 (教育学部3年)	河野 佐知子 (教育学部2年)	
	井原 冴香 (教育学部3年)	清家 弘介 (教育学部2年)	
	浦野 咲奈 (教育学部3年)	内藤 まり香 (教育学部2年)	
	尾崎 愛 (教育学部3年)	中野 宏美 (教育学部2年)	
	笠井 智美 (教育学部3年)	那須 悠一 (教育学部2年)	
	栗田 智香 (教育学部3年)	日野 新太郎 (教育学部2年)	

神下 真美 (教育学部 3 年)
甲田 弓加里 (教育学部 3 年)
武安 智美 (教育学部 3 年)
段松 千尋 (教育学部 3 年)
松井 美有 (教育学部 3 年)
三浦 翔子 (教育学部 3 年)
松添 麻美 (教育学部 3 年)
三谷 祐太 (教育学部 3 年)
竹端 正伸 (教育学部 3 年)
倉田 祐子 (教育学部 3 年)
清水 寛子 (教育学部 3 年)
角田 佳奈 (教育学部 3 年)
武田 歩 (教育学部 3 年)
土井 聡子 (教育学部 3 年)
那須 絵梨子 (教育学部 3 年)
幸山 将大 (教育学部 3 年)
相田 千尋 (教育学部 3 年)
石井 貴子 (教育学部 3 年)
小川 知樹 (教育学部 3 年)

木内 健太 (教育学部 2 年)
横山 実紀 (教育学部 2 年)
森末 安寿紗 (教育学部 2 年)
蔵本 愛里 (教育学部 2 年)
和良地 翔平 (教育学部 2 年)

計 47 名



共催: 香川県教育文化研究所

後援: 香川県教育委員会、高松市教育委員会、香川県 PTA 連絡協議会、高松市 PTA 連絡協議会、朝日新聞高松総局、RSK 山陽放送、RNC 西日本放送、NHK 高松放送局、OHK 岡山放送、KSB 瀬戸内海放送、産経新聞高松支局、山陽新聞社、四国新聞社、TSC テレビせとうち、毎日新聞高松支局、読売新聞大阪本社